トルストイ翁論文

石川啄木

青空文庫

レオ・トルストイ翁のこの驚嘆すべき論文は、千九百四年（明治三十七年）六月二十七日を以てロンドン・タイムス紙上に發表されたものである。その日即ち日本皇帝が旅順港襲撃の功勞に對する勅語を東郷聯合艦隊司令長官に賜はつた翌日、滿洲に於ける日本陸軍が分水嶺の占領に成功した日であつた。當時極東の海陸に起つてゐた悲しむべき出來事の電報は、日一日とその日本軍の豫想以上なる成功を以て世界を駭かしてゐた。さうしてその時に當つて、この論文の大意を傳へた電報は、實にそれ等の恐るべき電報にも增して深い、且つ一種不可思議な感動を數知れぬ人々の心に惹起せしめたものであつた。日本では八月の初めに至つて東京朝日新聞、週刊平民新聞の二紙がその全文を譯載し、九月一日の雜誌時代思潮は英文の全文を轉載した。さうして色々の批評を喚起した。此處に寫した譯文は即ちその平民新聞第三十九號（八月七日）の殆ど全紙面を埋めたもので、同號はために再版となり、後また文明堂といふ一書肆から四六版の冊子として發行されたが、今はもう絶版となつた。飜譯は平民社の諸氏、殊に幸德、堺二氏の協力によつたものと認められる。

平民新聞はこの譯文を發表して置いて、更に次の號、即ち第四十號（八月十四日）の社説に於いてトルストイ翁の論旨に對する批評を試みた。蓋しそれは、社會主義の見地を持してゐたこの新聞にとつては正にその必要があつたのである。さうしてこれを試みるに當つて、かの記者の先づ發した聲は實はその抑へむとして抑へ難き歡喜の聲であつた。「吾人は之を讀んで、殆ど古代の聖賢若くは豫言者の聲を聽くの思ひありき。」かういふ讃嘆の言葉をも彼等は吝まなかつた。想ふに、當時彼等は國民を擧げて戰勝の恐ろしい喜びに心を奪はれ、狂人の如く叫び且つ奔つてゐる間に、ひとり非戰論の孤壘を守つて、嚴酷なる當局の壓迫の下に苦しい戰ひを續けてゐたのである。さればその時に於いて、日本人の間にも少なからざる思慕者を有するトルストイ翁がその大膽なる非戰意見を發表したといふことは、その論旨の如何に拘らず、實際彼等にとつては思ひがけざる有力の援軍を得たやうに感じられたに違ひない。さうして又、一言一句の末にまで容赦なき拘束を受けて、何事に限らず、その思ふ所をそのままに言ふことを許されない境遇にゐた彼等は、翁の大膽なる論文とその大膽を敢てし得る勢力とに對して、限りなき羨望の情を起さざるを得なかつたに違ひない。「而して吾人が特に本論に於て、感嘆崇敬措く能はざる所の者は、彼が戰時に於ける一般社會の心的及び物的情狀を觀察評論して、露國一億三千萬人、日本四千五百萬人の、曾て言ふこと能はざる所を直言し、決して寫す能はざる所を直寫して寸毫の忌憚する所なきに在り。」これ實に彼等我が日本に於ける不幸なる人道擁護者の眞情であつた。

然しながら彼等は社會主義者であつた。さうして又明白に社會主義者たる意識をもつてゐた。故にかの記者は、翁の説く所の戰爭の起因及びその救治の方法の、あまりに單純に、あまりに正直に、さうしてあまりに無計畫なるを見ては、「單に如此（かくのごと）きに過ぎずとせば、吾人豈失望せざるを得んや。何となれば、是れ恰も『如何にして富むべきや』てふ問題に對して、『金を得るに在り』と答ふるに均しければ也。是れ現時の問題を解決し得るの答辯にあらずして、唯だ問題を以て問題に答ふる者に非ずや。」と叫ばざるを得なかつた。（人は盡く夷齊（いせい）に非ず。單に『悔改めよ』と叫ぶこと、幾千萬

年なるも、若しその生活の状態を變じて衣食を足らしむるに非ずんば、其相喰み、相搏つ、依然として今日の如けんのみ）これは唯物史觀の流れを汲む人々の口から、當然出ねばならぬ言葉であつた。かくてかの記者は進んで彼等自身の戰爭觀を概説し、「要するにトルストイ翁は、戰爭の原因を以て個人の墮落に歸す、故に悔改めよと教へて之を救はんと欲す。吾人社會主義者は、戰爭の原因を以て經濟的競爭に歸す、故に經濟的競爭を廢して之を防遏せんと欲す。」とし、以て兩者の相和すべからざる相違を宣明せざるを得なかつた。

この宣明は、然しながら、當時の世人から少しも眼中に置かれなかつた。この一事は、他の今日までに我々に示された幾多の事實と共に、日本人――文化の民を以て誇稱する日本人の事實を理解する力の如何に淺弱に、さうしてこの自負心強き民族の如何に偏狹なる、如何に獨斷的なる、如何に厭ふべき民族なるかを語るものである。即ち、彼等はこの宣明をなしたるに拘らず、單にトルストイ翁の非戰論を譯載し、且つ彼等も亦一個の非戰主義者であつたが故に、當時世人から一般にトルストイを祖述する者として取り扱はれ、甚だしきに至つては、日本の非戰論者が主戰論者に對して非人道と罵り、惡魔と呼んで罵詈するのは、トルストイの精神とは全く違ふのだといふやうな非難をさへ蒙つたのである。さうして此非難の發言者は、實に當時トルストイの崇拜者、飜譯者として名を知られてゐた宗教家加藤直士氏であつた。彼は、恰もかの法廷に於ける罪人が、自己に不利益なる證據物に對しては全然關知せざるものの如く裝ひ、或は虛構の言を以て自己の罪を否定せむと試むるが如く、その矛盾極まる主戰論を支持せむが爲には、トルストイ翁が如何に酷烈にその論敵を取り扱ふ人であるかの事實さへも曲庇して省りみなかつたのである。

若し夫れこの論文それ自身に加へられた他の日本人の批評に至つては、また實に畢竟「日本人」の批評であつた。日本第一流の記者、而して御用紙國民新聞社長たる德富猪一郎氏は、翁が露國を攻撃した點に對しては、「これ恐らくは天がトルストイ伯の口を假りて、露國の罪惡を彈劾せしめたるの言なるべし。」と賞讃しながら、日本の行爲を攻撃した部分に對しては、「此に至りて伯も亦スラーヴ人の本色を脱する能はず候。」と評した。又かの高名なる宗教家海老名彈正氏も、翁が露西亞の宗教家、學者、識者を罵倒し、その政治に反對し、延いて戰爭そのものに反對するに至つた所以を力強く是認して、「彼が絶對的に非戰論者たらざるを得ないのは、實に尤も千萬である。」と言ひながら、やがて何等の説明もなく、「彼は露西亞帝國の豫言者である。然も彼をして日本帝國の豫言者となし、吾人をして其聲に傾聽せしめんと欲するは大なる謬見である。」といふ結論に達せねばならなかつた――然り、ねばならなかつた。又他の人々も、或は右同樣の筆法を以て、或は戰爭正當論を以て、各々、日本人にして翁の言に眞面目に耳を傾くる者の生ぜんことを防遏するに努めねばならなかつた。實際當時の日本論客の意見は、平民新聞記者の笑つた如く、何れも皆「非戰論は露西亞には適切だが、日本には宜しくない。」といふ事に歸着したのである。さうして彼等愛國家の中の一人が、「翁は我が日本を見て露國と同一となす。不幸にして我が國情の充分に彼の地に傳へられざりし爲、翁をして非難の言を放たしめたるは吾人の悲しむ所なり。」と言つた時、同じ記者の酬いた一矢はかうであつた。曰く、「否、翁にして日本の國情を知悉せば、更に日本攻撃の筆鋒鋭利を加へしことならん。」

ただその間に於て、ひとり異色を帶びて、翁の理想の直ちに實行する能はざるものなるを首肯しつつ、猶且つ非常の敬意を以て之を辯護したものは、雜誌時代思潮であつた。

予の始めてこの論文に接したのは、實にその時代思潮に轉載された英文によつてである。當時語學の力の淺い十九歳の予の頭腦には、無論ただ論旨の大體が朧氣に映じたに過ぎなかつた。さうして到る處に星の如く輝いてゐる直截、峻烈、大膽の言葉に對して、その解し得たる限りに於て、時々ただ眼を圓くして驚いたに過ぎなかつた。「流石に偉い。然し行はれない。」これ當時の予のこの論文に與へた批評であつた。さうしてそれつきり忘れて了つた。予も亦無雜作に戰爭を是認し、且つ好む「日本人」の一人であつたのである。

その夜、予が茲に初めてこの論文を思ひ出し、さうして之を態々寫し取るやうな心を起すまでには八年の歳月が色々の起伏を以て流れて行つた。八年！　今や日本の海軍は更に對米戰爭の爲に準備せられてゐる。さうしてかの偉大なる露西亞人はもう此世の人でない。

然し予は今猶決してトルストイ宗の信者ではないのである。予はただ翁のこの論に對して、今も猶「偉い、然し行はれない。」といふ外はない。但しそれは、八年前とは全く違つた意味に於てである。

この論文を書いた時、翁は七十七歳であつた。（明治四十四年五月稿）

青空文庫情報

底本：「啄木全集　第十巻」岩波書店
　　1961（昭和36）年8月10日新装第1刷発行
入力：蒋龍
校正：小林繁雄
2009年9月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

トルストイ翁論文

石川啄木

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/